

合理的配慮における ICT ツールの活用と教育実践Ⅲ

企画者	石飛了一 生田 茂	(筑波大学附属大塚特別支援学校) (大妻女子大学社会情報学部)
司会者	根本文雄	(筑波大学附属大塚特別支援学校)
話題提供者	山下さつき 遠藤貴裕 五月女智子 富山 仁子	(東京都立府中けやきの森学園) (千葉県立八千代特別支援学校) (宇都宮大学教育学部附属特別支援学校) (栃木県立富屋特別支援学校)
指定討論者	土井幸輝 是枝喜代治	(国立特別支援教育総合研究所) (東洋大学ライフデザイン学部)

KEY WORDS: 合理的配慮, ICT ツール, 教育実践

【企画趣旨】

昨年度の本企画では、「特別支援学校3校における ICT ツールを活用した取り組み」「特別支援教育コーディネーターの巡回相談で訪れる学校の教師との共同の取り組み」「グリッドマークによる音声や動画を再生できる音声ペンの最新のソフトウェアやハードウェアの開発状況と推奨される活用事例」の紹介を行い、今後のインクルーシブ教育の発展のための合理的配慮指針に基づく取り組みのあり方について検討を行った。

今年度は、公立の特別支援学校における実践事例を中心に話題提供を行うことで、合理的配慮指針に基づく、ICT ツールを活用した手作り教材の制作と教育実践が、どの学校においても実現可能であることを本シンポジウムに参加された皆さんと共有し、今後の共同の取り組みのあり方について議論を深めたい。

【話題提供者の趣旨】

1. 児童生徒の学びを支えるための音声ペンの活用事例 山下さつき (東京都立けやきの森学園)

本校では平成 28 年度から音声ペンの実践に取り組み、知的障害教育部門、肢体不自由教育部門、訪問教育で、多様な実践を行なっている。その実践を分類すると、①教科の内容をわかりやすく伝える支援、②コミュニケーションツールとしての活用、③訪問教育、院内学級での実践の3つが柱となっている。

①教科の内容をわかりやすく伝える支援では、音楽の「楽譜が読めない生徒への音楽譜」、体育の「動きのイメージが持ちにくい生徒への動画教科書」等、教員が生徒の実態に合わせて支援を行なった。②コミュニケーションツールとしての活用では、障害のため発音が不明瞭な生徒のための手軽なコミュニケーションボードを作成した。③訪問学級での実践では、限られた時間、スペースの中で、自分で操作しながら学習できるよう、音声ペンや教材に様々な工夫をしながら実践した。平成 29 年度も、この3つの柱を中心として研究を進め、本校だけではなく、地域の学校と連携した取り組みを実践していくことを目指している。

2. 音声ペンとコミュニケーションカードを活用した実践 — 中学部段階における伝える力の広がりを目指して— 遠藤 貴裕 (千葉県立八千代特別支援学校)

日常生活において簡単な言語理解はあるが、言語表出において発音が不明瞭な中学部の生徒に対して音声ペンの活用を試みた。語彙教や言葉でのやりとりを増やして欲しいという保護者と本人の願いから、朝の学習や帰りの会の振り返り場面において、日誌やコミュニケーションカードの選択や発表を行った。人との関わりが好きで、相手に伝えたい気持ちが高い生徒が、補助的手段として音声ペンを使

用した。生徒の“伝える力”をより引き出し、気持ちや意思を他者と共有するとともに、音声を復唱することで言語発達を促すことを目的に家庭と連携して取り組んだ事例について報告する。

3. 発達年齢に応じた音声ペンの活用について

五月女智子、富山仁子 (栃木県立富屋特別支援学校)

小学部2年生の児童に、発達段階に応じた音声ペンの活用を試みた。まず、発語がない児童たちに朝の会や帰りの会でのコミュニケーションツールとして音声ペンを活用した。発達年齢も幼く、自発的な行動も少ない児童に対して、友達の呼名や挨拶の場面などで使用した。毎日繰り返すことで、一人で操作が難しかった児童が、だんだん操作性も上がってきて一人で取り組めるようになってきたり、自分の出した音声に友達が反応するのを笑顔で見るようになってきたりした。

次に発語が少ないが内言語が豊かな児童に対して、授業の振り返りなどの発表場面で使用した。発音の不明瞭さを音声ペンで補うことで、積極的に取り組めるようになってきた。さらに、言語でのコミュニケーションができる児童に対しては、文字学習の学習ツールとして、今回新たに活用してみた。本シンポジウムでは、それぞれの段階における活用の実践を報告する。

【指定討論者の趣旨】

土井幸輝 (国立特別支援教育総合研究所)

本シンポジウムで取り上げる ICT ツールを利活用した教育実践について、その情報共有は、今後も益々必要となる。話題提供者の実践事例のプレゼンを踏まえ、参加者の皆さんと共に、特別支援教育における ICT ツールの利活用の展望について議論を行いたい。

是枝喜代治 (東洋大学ライフデザイン学部)

近年、音声ペン等の ICT ツールを活用した多様な教育実践が展開されている。指定討論では、言語理解はあるものの麻痺等により表出言語に困難を示す児童生徒へのコミュニケーション支援のあり方や、個人々のニーズに応じた合理的配慮のあり方について協議していきたい。

付記

本研究実践報告は、本人あるいは保護者、所属機関等の許可を得て掲載しています。また、各学校における実践では、JSPS 科研費 JP16K04844 (代表:大妻女子大学 生田茂) 及び大妻女子大学戦略的個人研究費 (S2810 代表:大妻女子大学 生田茂) のお世話になっています。(ISHITOBI Ryouchi, IKUTA Shigeru, NEMOTO Fumio, YAMASHITA Satsuki, ENDO Takahiro, SAOTOME Noriko, TOMIYAMA Jinko, DOI Kouki, KOREEDA Kiyoji)